

黄鶴樓

崔

顥

昔人已上黄鶴樓
乘舟去

此地空しく
余す黄鶴樓

黄鶴一去
不复返

白雲千載空しく
悠々

晴川歷々
漢陽の樹

芳草萋々
鶻鶻洲

日暮郷関
何れの処は是なる

煙波江上人
をして愁えしむ

【作者】 崔顥（七〇四〜七五四年）盛唐の詩人。「水卜」洲（べんしゅう）《河南省開封府》の人。開元十一（七

二二）年の進士、秀才であったが酒と遊びに溺れ軽薄の評をうけた。晩年は格調の高い詩風を出す。天宝十三年に没す。年五十歳

【語釈】 *黄鶴樓：湖北省武漢市長江南岸蛇山の西端にある樓閣。昔、この地に辛（しん）という酒店があった。

毎日のように老人が来て酒を飲んでゆく。酒代は払わないが辛はいやな顔もせず飲ませていた。半年程して老人は酒代の代わりにといて橘の皮で黄色い鶴を描き、その鶴が客の歌にあわせて踊りだすというので評判になり、店は大繁盛。辛は巨満の富を築いた。十年ののち老人が再び現れ、笛を吹くと白雲が湧きおこり、老人は鶴に乗って飛び去った。辛はここに楼を建て黄鶴樓と名づけたという伝説がある。

*悠 悠：遙（はるか）な大空を流れていくさま。ゆったりとしているさま。

*歴 歴：はつきりとみえること。 *漢 陽：武昌より長江を隔（へだ）てた対岸にある地名。

*萋 萋：草の盛んに茂るさま。 *鶻鶻洲：武昌の西南の長江にある中洲 *煙 波：夕もや。

【通釈】 昔の仙人は已に白雲とともに黄鶴に乗って去り、この地にはただ黄鶴樓が残っているばかりである。

一度去った仙人の乗った黄鶴は再び帰っては来ず、白雲のみが千年も昔のままゆったりと浮かんでいる。この楼から望めば晴れ渡った川の景色ははつきりとして、対岸の漢陽の樹色が見え、草の盛んに茂っている鶻鶻洲も近くに見える。

《だが自分は天涯に漂泊（ひょうぱく）の身》日暮れになると郷里はどちらの方角にあたるかと思われ、夕もやが立ち込める長江の風情（ふぜい）が私を悲しませるのである。